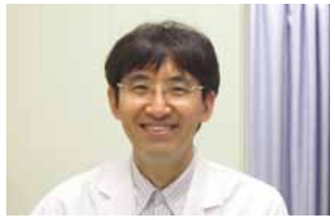
県立広島病院広報誌
もみじ
第44号
2012.10.1
発行
県立広島病院 〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号
※県立広島病院の様々な情報をホームページへ掲載しています。
県立広島病院 で 検索 （URL：http://www.hph.pref.hiroshima.jp/）
理念：県民の皆様に愛され信頼される病院をめざします

連携医院のご紹介

今回は「有床診療所の“良いところ”を継続していくこと」を何よりも大切にしておられる福原整形外科、福原宏平先生です。


福原院長先生

福原整形外科／福原ディケアセンター

〒734−0014
広島市南区宇品西4-4-8
電　話／082-251-6219
院　長／福原　宏平
診療科／整形外科・リハビリテーション・介護保険

○いつ頃開業されましたか。

2000年の4月に開業しました。それまでの勤務医時代から介護分野の大切さを感じてケアマネージャーの資格を取得し、患者さんのお宅への訪問を始めました。その頃は本当に大変でしたが、患者さんの実際の生活を知るという貴重な体験を得ました。医師という立場だけでは見えなかった生活がたくさんありました。訪問は本当に大切。やっていて本当に良かったと思っています。今では当院の複数の職員がケアマネージャーの資格を取得し、実務は全部任せています。

○福原先生が毎日の診療で大切にされていることは何ですか。

手術をやっていることもあり、とにかく丁寧に説明すること、そして納得いただくことを心がけております。また、有床診療所という立場から言いますと、有床診療所は地域の相談相手。現在はその数が少なくなってきておりますが、今後もできる限り、有床診療所の良いところを生かしてこれからも地域の方々のために頑張っていきたいと思います。

○県病院についてひとことお願いします。

最近、患者さんの入院相談を多く聞いていただけるようになりました。また、地域連携システムの導入は、連携している患者さんの情報を知りたいときに把握できることで、患者さんの治療に多いに役立つと思います。

福原整形外科外観

【取材後記】

福原先生の訪問のお話はとても生き生きと真に迫り、患者さんの生活を知ることの大切さを強く感じました。当院も、患者さんの生活をしっかりと捉えながら相談に応じ、患者さんを支援する様々な方との連携を大切にしていきます。

県立広島病院からのお知らせ

第4回 がん診療連携拠点病院共催 市民講演会

と　き　平成24年10月27日（土）
13:30〜15:30（12:30受付開始）
ところ　中国新聞ホール
テーマ　知ろう 学ぼう がんの基礎から最新治療まで
講　師　県立広島病院　板本　敏行
広島赤十字・原爆病院　札埜　和美
広島大学病院　檜井 孝夫
主　催　がん診療連携拠点病院
（広島大学病院／県立広島病院／広島赤十字・原爆病院／広島市立安佐市民病院／広島市立広島市民病院）
詳しい内容はHPへ　http://gan-hiroshima.wfamp.com/

がん医療従事者研修会

と　き　平成24年10月29日（月）
19:00〜
ところ　中央棟2階　講堂
テーマ　緩和ケア:病院から地域へ
講　師　緩和ケア科部長　岡崎正典 ほか
問合せ先　総務課管理係　（担当:藤原）
TEL:082-254-1818
内線（4273）

※詳しくは県立広島病院ホームページへ 県立広島病院 で 検索 （URL:http://www.hph.pref.hiroshima.jp/）

外来診療のご案内

診療受付時間
午前８時30分〜午前11時00分
※午後の診察は科によって異なります。

休診日
土曜日・日曜日・祝祭日
年末年始（12月29日〜1月3日）

紹介状持参のお願い
初診時、他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費のほか2,620円のお支払いが必要となります。初診の際には、紹介状をお持ちください。
※当院では、予約診療を優先して診察しています。予約診療以外で受診されると待ち時間が長くなることがありますので、ご了承ください。

県病院ミュージアム

県病院内に展示している絵画を紹介します！！

画名 渓潤秋耀　**作者** 奥田元宋

美しいものが溢れる秋、おいしいものが豊富な秋、そして楽しいことが多い秋。皆様、元気に秋を満喫しましょう。
（院長　桑原正雄）

インフォメーション

栄養管理科

入院された患者さんにお楽しみ頂けるようなメニューを考案しています。

入院中のお食事について

少量づつ様々な料理をお出ししています

栄養管理科では、安全で新鮮な食材を選択し、衛生管理に配慮しながら心を込めて盛り付けを行っています。2種類の食事メニューからお好きな食事を選んで頂ける選択食をはじめ、季節感を盛り込んだ行事食など、アクセントをつけたきめ細かい対応をしています。

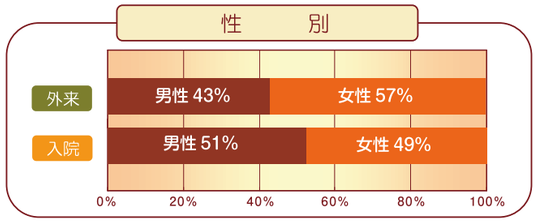
また、食欲低下がある方には、少量で品数を多くした、もみじ食を提供しています。又、担当の管理栄養士が患者さんのベッドサイドにお伺いし、食欲の低下されている患者さんや食物がうまく飲み込めない、食べにくい患者さんへ工夫したお食事が提供できるよう心がけています。

患者さん満足度 アンケート調査の報告

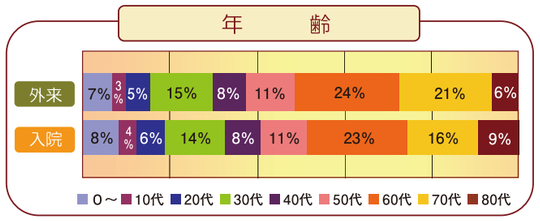
当院では毎年１回、入院及び外来患者さんに満足度調査を実施しています。多数の患者さんにご協力頂き、誠にありがとうございました。その結果を報告いたします。当院及び職員に対していずれも高い評価を頂いた反面、院内施設や待ち時間、駐車場について様々なご意見をいただきました。なお今後ともお気づきの点を院内常設のご意見箱へお寄せ下さい。

調査実施日	入院 平成24年２月15日～３月14日	外来 平成24年２月21日
対象	入院 期間中に退院が決定した患者さん	外来 調査日に来院した患者さん
回収結果	入院 ４６３枚（回収率77.0%）	外来 ４３４枚（回収率87.0%）

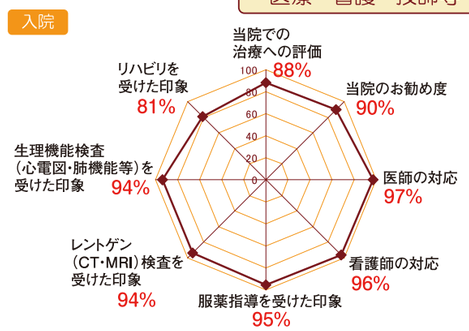
性別

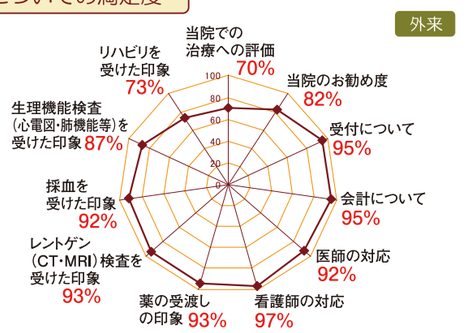


年齢

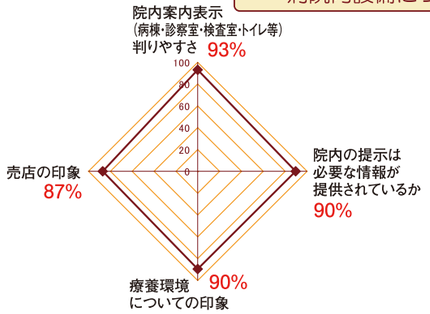


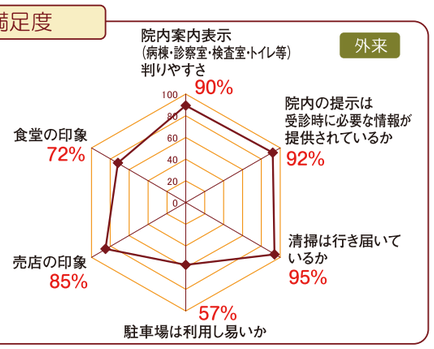
医療・看護・技師等・職員についての満足度





病院内設備についての満足度





患者さんの声

- 今まで色々な病院に入院した経験がありますが、当病院が一番安心して利用できるように思います。
- お見舞い時における駐車料金一定時間無料の駐車券の処理方法がわかりにくい。病棟の受付にわかりやすい案内が欲しい。
- 医療水準が他の病院より高いので安心して治療をうけることができる。看護師の方にも丁寧に対応していただきました。
- 診察順番の表示が欲しい。病棟・検査室・売店等の案内がわかりにくい。

外科医の独り言 no.13

― 医者の資質 ―

何かの本で読んだことがありますが、こんな学生がいたそうです。彼は医学部を目指して3浪中でした。阪神・淡路大震災が発生したその日、彼にとっては大学入試センター試験を間近に控えていました。その日の予備校の授業に彼の姿はなく、担当の先生は、大変な天災を映し出すテレビの前に釘付けになって授業に出てこなかったと思っていたそうです。しかし、後日わかったことは、彼はその早朝から、多量の水やカップ麺を荷造りして被災地に送るボランティア作業をしていたそうです。「自分のことより困っている他人を支えたい」と思っただけでなく、すぐに行動に移したのです。このような彼の行動は学校で教えても身に付くものではなく、いわゆる“資質”なのです。もし私が同じ状況にあったなら”思いやる“ことはできても”行動“はできなかったでしょう。その後、彼は医師になったという話でしたが、患者さんを思いやり、患者さんの立場になって行動できる立派な医師になっているでしょう。

以前、医学部入学試験の面接官を担当したことがありました。AO（アドミッッション・オフィス）入試といって受験者自身の人物像を学校側の求める学生像と照らし合わせて合否を決める入試です。医学部ではセンター試験は必須ですが、あとは小論文と面接でいわゆる医師としての資質があるかどうかを判断するのです。しかし医師の資質は何かと問われれば、現役の医師からも様々な答えが返ってきます。

その面接の中で、今でも鮮明に覚えている学生がいました。面接は個人面接とグループ面接があり、グループ面接ではある一つの課題について受験生6人で討論する形式です。その中に、いわゆる素朴な大人しい男子学生がいました。たしか課題は「地球温暖化について」でした。皆、合格するためには積極的に自分の意見を伝え、目立つ必要があります。その点、女子学生は積極的で口が立ちますね、その中で私の気になっていた素朴な学生は自分の意見を言う気配がなく、皆の意見を聞いているだけでした。ただし、人の話を聞く姿勢が真剣かつ自然で、しゃべっていないけど、その議論の中にちゃんと入っているのでした。ただ、一言もしゃべらないのでは面接官の印象も良いはずはないので、私はたまらず「○○君、君の意見はどうなのですか？」と水を向けてみました。すると彼の答えは「話の内容が難しすぎて、とにかく話を理解することで精一杯でした。それで皆の意見を聞いてみて間違っている人は一人もいないと思います」でした。“ひとの話をよく聞く”ということも医師としての大事な資質と思っていた私はもちろん100点を付けましたが、他の面接官の心象が良くなかったのか、それともセンター試験の成績が悪かったのか、残念ながら春に再び彼の姿を見ることはありませんでした。

副院長（消化器･乳腺･移植外科主任部長）
板本敏行（いたもと　としゆき）

看護部だより

皮膚科外来

患者さんとのコミュニケーションを大切にしています

皮膚科外来を受診される患者さんの多くは、発疹での受診でこられます。その発疹も皮膚に限局した疾患から全身症状の表現の一つとしての発疹、慢性のもの、急性で緊急性のある疾患と様々です。

皮膚科疾患が他の疾患と大きく異なる点は「容易に肉眼で観察できる」という点です。その為、病気に対する不安が強く、病状の悪化や身体表面に病変が現れるため他人にどう思われるのか想像以上に患者さんは心理的苦痛を抱かれています。

これらの心理的影響を考慮しながら、闘病意欲を失われることなく、家庭での処置ケアが継続されることを目指して患者さんと関われるよう心がけています。

「あの人とは肌（膚）が合う、合わない」などと言うことがあります。このようにコミュニケーションの媒体としての肌（膚）の意味があり、「皮膚」は人間関係を造り上げる臓器といえます。皮膚科の看護師として、その意味に沿うように患者さんとのコミュニケーションを大切にしていきたいと思います。

皮膚科外来スタッフと児玉専任主査（中央）が手にしているのは皮膚断面の模型です